



井伊直弼と吉田松陰

世田谷区内には意外に多くの史跡が残っている。大きなものから目立たぬほんの小さなもので、それぞれが現代のまちなかに世田谷の地に営んだ人の足跡を伝えてくれる。想像の力が加わるとき、にわかにかこれらの史跡は輝き出し、かつての物語を語り出す。まちの風景に時の奥行きをつけて、過去から現在、そして未来へと風景の履歴を描き出してくれる。

大老井伊直弼の墓のある豪徳寺と若

歴史の襞を織りこんだまち

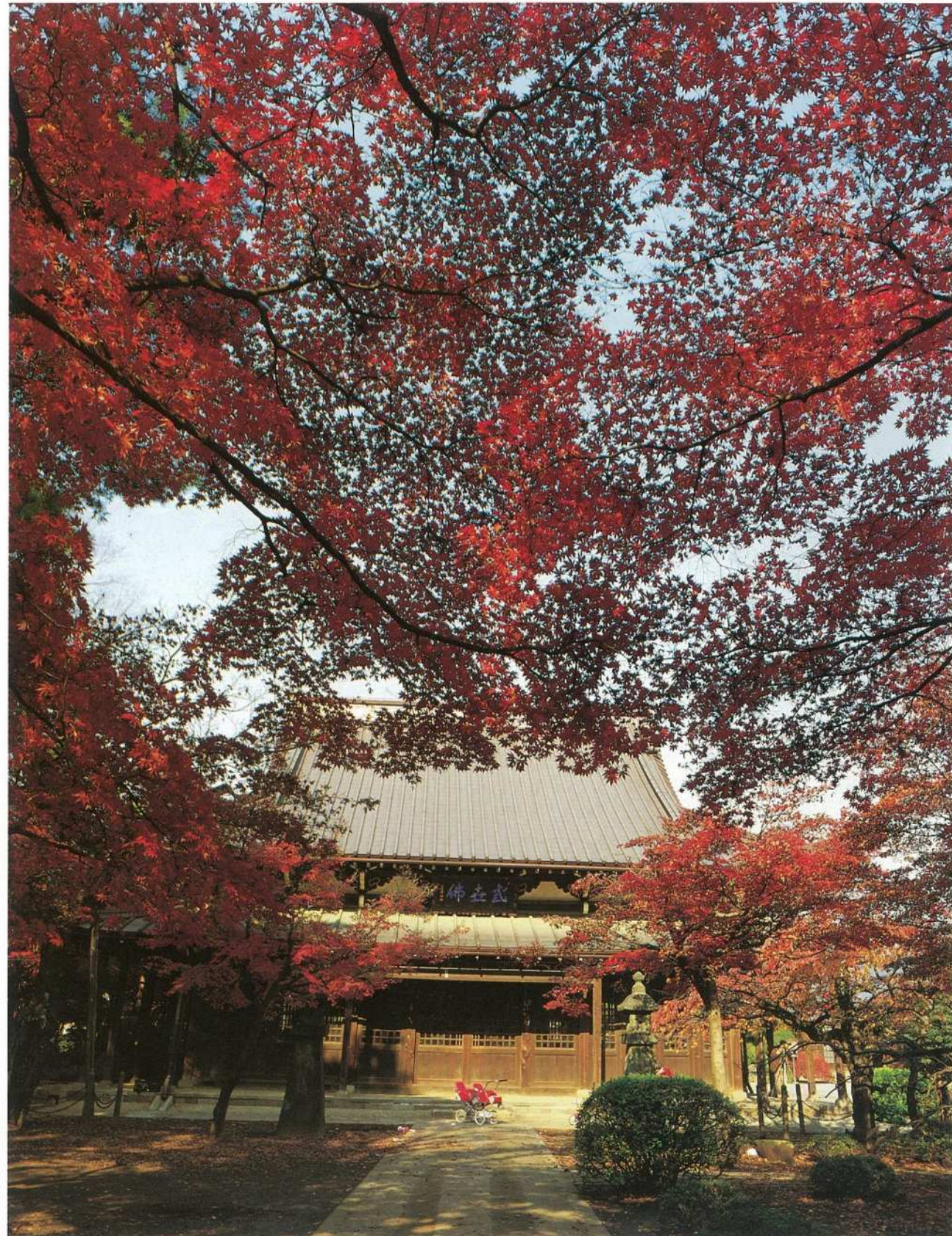
林の松陰神社。幕末の日本を大きく左右した二人のライバルが、こんなにも近く葬られていることに気づく人は少ない。桜田門外の変で水戸浪士に暗殺された井伊直弼が、井伊家菩提寺豪徳寺の静かな境内の奥に眠っている。その暗殺のわずか数カ月前、安政の大獄によって処刑された吉田松陰も、隣の若林村の毛利家抱屋敷内に弟子の高杉晋作や伊藤博文の手で葬られ、松陰神社の始まりとなっている。歴史の生々しいドラマを伝えてくれる因縁浅からぬ二つの墓といえる。



豪徳寺名物招き猫⑳



吉田松陰が眠る墓㉑



紅葉の美しい豪徳寺境内㉒

常盤伝説とさぎ草の里

豪徳寺二丁目の世田谷城址公園は、中世の世田谷を支配した吉良氏の居城の跡だ。わずかに小高い丘には木々が茂り、昔を偲ぶものは土塁の一部のみになっているが、郷土史を繙き、ゆかりの地を歩けば中世の世田谷のありさまが浮かび上がってくる。七代城主頼康の側室の一人常盤を葬ったという、上馬五丁目の常盤塚。この小さな塚には悲しい話が伝わっている。頼康にたいそう愛された常盤は他の側室に妬まれ、偽りの告げ口をされて、頼康にも疑われるようになった。誤解のとけるまで落ちのびようとした常盤だが、身重の体と心労とでいくばくも歩を進めぬうちに追手に取り囲まれ、この地で自ら命を絶ち、頼康の子を死産したという。のち、不明を恥じた頼康は、死児を若宮八幡として駒留八幡社に併祀し、常盤のための弁財天を勧請したと伝えられる。

また、奥沢城主の愛娘常盤が頼康と結ばれたのは、頼康の放った鷹が捕殺した白鷺の脚に常盤の詠んだ歌が結んであったことがきっかけといわれている。白鷺の骸を埋めた奥沢の深田一帯には、雪と見まがう「さぎ草」の花が



白さぎに似た小さな花が咲く



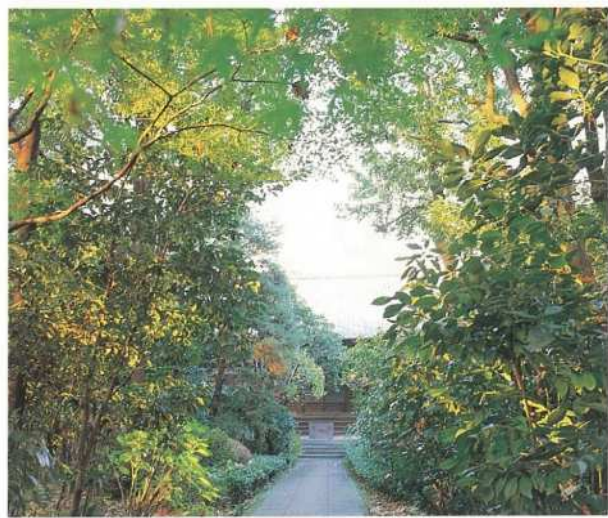
中世世田谷を支配した吉良氏の世田谷城址



まちの一角にひっそりとある常盤塚。訪れる人を伝説の世界へ誘う



浄真寺の境内⑧



うっそうとした樹木の實相院⑨



九品仏浄真寺の「お面かぶり」の行事は三年に一度行なわれる。都の郷土芸能にも指定されている⑩



常盤伝説がからむ駒留八幡だが、歴史はさらにさかのぼり、鎌倉時代後期、北條左近太郎入道成頼が乗馬の留まった地に勧請したとの由来を持つ⑪

一面に咲いたという。このさぎ草は、昭和の初期まで豊富に自生していたようだが、現在では「区の花」となっているもの、奥沢城址である浄真寺の「さぎ草園」に往時を偲ぶほかない。吉良氏ゆかりの史跡はほかにも多い。頼康の法名がつけられた桜一丁目の勝光院。宮坂の世田谷八幡は頼康によって建立されたともいわれる。弦巻三丁目の實相院は吉良家最後の当主の開いた寺で、森閑とした境内は都会にあつて貴重なものだ。まちなかに織りこまれた歴史の裏は何百年にもわたって生きつづけ、まちに歴史と伝説の陰翳をつけている。



端正なたたずまいの勝光院。昔から格式の高い寺だ⑫

